

第一種健康診断特例区域等の 検証に関する検討会（第2回）	資料1－3
令和3年2月18日	

増田構成員提出資料

2021 年 2 月 16 日

「第一種健康診断特例区域等の検証に関する検討会」座長

佐々木 康人様

構成員の増田善信です。私は 2020 年 11 月 18 日、「第一種健康診断特例区域等の検証に関する検討会（第 1 回）」に発言し議事録にも掲載され、終了後の、この検討会の検討項目への追加・検討項目に、①原爆由来の雨、チリの降下範囲を確認する課題、②原爆由来の歯ぐきからの出血、下痢、嘔吐など急性疾患の発現を確認する課題、を提案しました【添付資料 1:参照】。また、添付資料 2 のように、原爆死没者追悼平和祈念館運営企画検討会の運営委員である田中熙巳氏（日本被団協代表委員）も同趣旨の要請を行っています。

「第一種健康診断特例区域等の検証に関する検討会（第 2 回）」の開催に当たり、改めて以下の 2 項目について提案します。

1、被爆者の体験記を電子化し、検索機能によって、原爆由来の雨、チリの降下範囲、および原爆由来の歯ぐきからの出血、下痢、嘔吐など急性疾患の発現範囲の推定に関する調査

①国立広島原爆死没者追悼平和祈念館には、平成 7 年厚生省が収集した体験記録集だけで 81,295 編あり、平成 17 年と平成 27 年に厚労省が収集した 11,778 編 と 11,346 編、さらに広島市が独自に収集した 3,379 編を加えると、実に 107,708 編もの体験記があります。恐らく長崎でも、これに近い数の手記集があると思います。これらの手記集をまず電子化します。

②この電子化した手記集を用いてパソコンで、雨、チリ、紙切れ、歯ぐきからの出血、下痢、嘔吐などで検索して、雨、チリ、紙切れ、歯ぐきからの出血、下痢、嘔吐などの基礎資料をつくります。

添付資料 3 は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館のホームページの電子化された「体験記」の最初の 60 編から、雨、チリ、紙切れ、歯ぐき、熱、斑点で検索した結果です。ほとんどが直爆や入市被爆の方ばかりで、歯ぐき、熱、斑点などの資料は余りありませんが、この方法の有効性は示せたと思います。

③この基礎資料を雨、チリ、紙切れ、歯ぐきからの出血、下痢、嘔吐などに分類して、GPS を用いて、それぞれの項目ごとに地図上にプロットし、雨、チリ、

紙切れ、歯ぐきからの出血、下痢、嘔吐など出現域を推定します。

④しかし、この出現域をそのまま出現域にしてはなりません。まして、行政が被爆者対策として用いる出現域にしてはなりません。なぜなら、この出現域を求めたオリジナルの資料は、被爆者の手記集というバイアスがかかっているからです。本来なら、少なくとも当時広島県に在住していた住民全体を網羅したアンケートによるものでなければならぬからです。

⑤しかし、それは不可能ですので、この出現域は参考資料として活用すべきであると思います。私は、広島地方裁判所の2020年7月29日の判決の通り、「黒い雨」やチリなどの残留放射線による内部被ばくが影響したと考えられる地域に拡大すべきだと思っています。

2、米占領軍が1945～50年に雨樋などの堆積物から採取した残留放射線の測定値を公表させること

添付資料4は奈良大学高橋博子教授が、1950年3月29日付のカール・テスマーABCC所長から米科学アカデミーの科学者宛の書簡から明らかにした資料です。そこには、米測定研究所(Traserlab)のメンカー(Menker)とレベンソール(Leventhal)の両氏が、広島や長崎で雨樋や泥の堆積、その他気象学データのサンプルを採取し、一部はABCCに残し、一部は彼らが持ち帰ったと記されています。

今まで「黒い雨地域」の「検討会」は「黒い雨に関する専門家会議」(1991年5月、第1回検討会・参考資料5)、『原爆体験者等健康意識調査報告書』等に関する検討会」(2012年7月、第1回検討会・参考資料8)の2回開かれていますが、いずれも広島原爆による残留放射線の資料がないことが大きな障害になっていたことを報告しています。

その残留放射線の資料が得られるかもしれないことが分かったのです。この検討会の総意として、日本政府に、ABCCの後継者である放射線影響研究所と、アメリカ政府に、この資料をはじめ、主として占領中に米軍が測定した放射線の資料の全部の公開を要求することを要請します。

添付資料 1

2020年11月18日

第一種健康診断特例区域等の検証に関する検討会
事務局様

検討会構成員 増田 善信

第一種健康診断特例区域等の検証における課題について（案）への修正・追加項目についてのお願い

原案には、「黒い雨」降雨域、放射性チリの拡散区域を検証する項目が入っていません。第1回検討会で提案した「被爆者の手記集などのPDF化を行い、「雨」、「チリ」、「紙切れ」、「歯ぐきなどからの出血」、「下痢」、「嘔吐」などで検索し、それぞれの事象の分布図などをつくり、原爆投下によってもたらされた障害を総合的に把握する必要があると考え、以下の修正と追加の項目を提案します。（修正・追加項目は赤字で表示）

1,

1 検証の基本的考え方（案）

- 今般の検証の目標は、これまで行われてきた検証を踏まえた上で、以下の4点を検証課題として設定する
 - ・原爆由来の放射性物質を確認する課題
 - ・原爆由来の雨、チリの降下範囲を確認する課題
 - ・原爆由来の歯ぐきなどからの出血、下痢、嘔吐など急性疾患の発現を確認する課題
 - ・健康影響が生じているか確認する課題

2,

2 具体的な検証課題（案）

- 原爆由来の雨、チリの降下範囲を確認する課題

<目的>

降雨域については、「宇田雨域」、「増田雨域」、「大瀧雨域」がある。これ

らをつくるのに用いた資料の上に、PDF 化された被爆者などの手記集から得られた「雨」や「チリ」のデータを加えて、現時点での最も正確な「原爆由来の雨やチリの降下範囲」を確定する。

○原爆由来の歯ぐきなどからの出血、下痢、嘔吐など急性疾患の発言を確認する課題

<目的>

PDF 化された被爆者などの手記集から得られた原爆由来の歯ぐきなどからの出血、下痢、嘔吐など急性疾患の発現を確認する

添付資料 2

第 18 回原爆死没者追悼平和祈念館運営企画検討会 意見票

委員氏名	田中 熙巳（日本原水爆被害者団体協議会）
------	----------------------

祈念館の運営・企画について、御意見ありましたら御記入ください。通称されています

10 年毎に厚生労働省が実施する被爆者実体調査の 1995 年調査は、被爆 50 年という大きな節目の年の調査になるので、抽出調査でなく悉皆調査を行うよう日本被団協は強い要請を行いました。この調査には各県の被爆者組織を束ねている日本被団協が積極的に協力しました。合わせて日本被団協は各人の被爆体験を記録することを奨励し、自由記述欄を設けて記録してもらうことを要請し実現しました。

この時の体験記録で公開を認めた、広島県の被爆者の体験記約 5 万人分、長崎県の被爆者の 3 万人分の自筆のコピーが、県別、氏名別に編纂され、国立原爆死没者追悼記念館に公開されています。広島県の追悼祈念館には広島、長崎両市被爆者の体験記が、長崎の祈念館には長崎の被爆者約 3 万人の体験記のみが公開されています。

国立原爆死没者追悼祈念館も国の慰霊事業として建設、運営することを日本被団協が要請して実現したものです。

これらの記録は自筆（手書き）文字なので、統計的データとして活用するにあいは、デジタルデータに変換しなければなりません。私の職業は理工系の研究者でしたので、

これらの体験記がデジタルな文章に変換されることを希望し、広島県の祈念館の担当者に 10 年程前から度々お願いしてきました。しかし、この作業は数年前までは膨大な人手と予算が必要でしたため実現できていません。テーマ別特別展示に利用する場合は対象を絞って行われているようですが。閲覧者がテーマを決めて閲覧できるよう希望したい。

今日のコンピュータ技術の急速な進歩で、読み上げ音声が即座に文字文章に変換できるようになっています。今年の補正予算、さもなければ来年度の予算に計上して、歴史的な、膨大な体験記録がさまざまな形で活用されることを希望します。

個人の閲覧においても、あるいはテーマを決めた研究の場合においてもさまざまな活用ができます。世界に唯一の膨大な記録が生かされることは、体験記を残した被爆者がみえなくなった時でも、死没被爆者の追悼の意味にもなるに違いありません。

御回答ありがとうございました。

ヒト	男女	年齢	被爆地	被爆状況	執筆年	職業	被爆場所	雨	紙切れ	チリ	歯ぐき	熱	斑点	雨やチリ、歯ぐきから出血、皮膚の斑点などの 具体的状況
A	女	19	長崎	直爆	1995	一般就業者	三菱重工長崎兵器製作所大橋工場				○	○	○	9月7日目眩がして倒れそれから寝たきりの毎日。40度の高熱続き全身に斑点が出、歯ぐきから出血が続き高熱を出して3日間位意識不明
B	男	小5年	広島	入市被爆	2002	児童	爆心地の西北約11km、極楽寺山の東側山腹(五日市高辺)	○	○					その後、大きなものは手のひら以上の焼け焦げた紙片(新聞・書類)が無数に舞い降り、また、上空を西北に向けて飛び過ぎていった。相前後し、日差しだった周辺が薄暗く曇り、黒い煤湿りの通り雨が数分間降り注ぎ、肌シャツが黒く汚れた
C	女	中2年	広島	直爆	2013	中学2年生	広島市南観音町	○		○				家の前の防空壕の中へ行くと、雨が降っていた。家の前の島に植えているトマトの葉や実に点々と黒い雨露が付き、舞い上がった塵が雨と一緒に落ちてきた
D	男	19	広島	直接被爆		軍人・軍属	広島第2陸軍病院 三滝分院(現西区))	○						焼け野をあちこち彷徨したがそのうちに黒い雨がふりだし、白い病衣はうす黒く染まった。黒い雨は1時間ぐらい降ったでしょうか
E	男	28	広島	直接被爆	1945	軍人・軍属	中国軍管区歩兵第1補充隊(中国第104部隊)	○						10時頃、天に舞ひ上った黒煙と、火災の煙は、天日を隠して雷鳴が起り、雷雨となった。牛田附近は大した事もなかったが、約30分位、大粒の雨が、パラ付く。市内の何処かは、相当に降った処もあったと思はれたが、……。雷雨まで起す程、天をおほひ逐した火災の煙であった
F	女	7	広島	直接被爆	2019	児童	本願寺広島別院[現中区寺町]	○						人の波に付いて歩いて歩いていると、大勢の人が避難している山に着きました。三滝の山かどこか分かりませんが、そこで雨が降り出したことを覚えています
G	男	5	広島	直接被爆	2013	乳幼児	広島市古田町高須(現西区(爆心地3.6km))	○						空が暗くなり、雨が降り始めた。それが黒かったことは憶えている。雨は直に止み、姉と、すぐそばの道路に行く。道は町の中心と西の郊外を結ぶ主要なもの
H	男	17	広島	直接被爆	1995	軍人・軍属	大本営陸軍部船舶司令部教育船舶兵団船舶通信隊補充隊(暁第16710部隊) 宇品町陸軍船舶司令部防空壕	○						その頃晴天だった広島島の空が俄かに曇り出し、一際強く俄雨がザーッと降り出し、そこ此処に水たまりが出来たが、まもなくその雨も上がり、一度は青空を覗かせながら太陽が照って来たが快晴になるに従い市の中央部に白い雲が？最初は入道雲に見えたが、それはだんだん上昇して、雲自体に命があって生きているかの様にモクモクと湧き上り、広がりながら次第に上空一面に覆いかぶさるかの様に見えた。今迄に見たこともない奇妙な巨大な雲が目の前に出現した
I	男	中4年	広島	直接被爆	2010	修道中学校	三菱重工広島造船所(現中区江波沖町))	○						9〜10時頃になって市内より避難して来る人がだんだんふえて来た。黒い雲から黒い雨が数分ふって来た。顔、手、水ブクレの人や全身ヤケド、これは大変だ

添付資料 4

米政府・軍の黒い雨調査

高橋博子（奈良大学）

2020 年 7 月 29 日の広島地裁での黒い雨訴訟の原告側の勝利は歴史的に画期的な判決だと思います。というのは、黒い雨訴訟は、まさしく広島・長崎の原爆による放射性降下物が争点の訴訟であり、それは、原爆を使用したアメリカが公式には否定し続け、隠し続けたい側面を浮き彫りにした判決だからです。

1945 年 9 月 12 日、マンハッタン計画副責任者のトーマス・ファール准将は「広島に放射線なし」とする声明を出しました。空中高く爆発した場合、放射線は消えてなくなるとする説明です。すでに日本帝国政府はスイス政府を通じて、毒ガス以上の非人道的兵器であり、国際法違反であるとして抗議を行っており、日本占領が開始されると、今度は連合国の記者によって、それを裏付ける報道がされました。フォーレルの声明はそれを打ち消す目的で出されたのです。

しかし、このような公式見解をアメリカの科学者は実際の広島・長崎での原爆の影響として信じていたのでしょうか？そうではないことが、米側の文書から明らかになっております。まず、広島・長崎への原爆投下前に、末にマンハッタン計画の科学者は放射線毒性小委員会を立ち上げ、放射線兵器の開発のための研究をしていました。戦後も米軍調査団として広島・長崎の黒い雨・残留放射線の調査を実施しました。1948 年から 1953 年まで米軍特殊兵器計画の下で米原子力委員会と協力し、放射線兵器の開発に取り組んでいました。残留放射線も内部被曝の影響も把握していたのです。

放射線を計測するために、米軍特殊兵器計画では 測定研究所 (Traserlab) というものを作り、測定者は実験場で測定するのみならず、日本にも派遣されました。ABCC の初代所長になったカール・テスマーは 1950 年 3 月 29 日、米科学アカデミーの科学者に向けて次のように報告しています。「私が電話で漠然とした形で話したように、広島に残留放射線について大まかな調査を行った測定研究所の 2 人の紳士、メンカー (Menker) 氏とレベンソール (Leventhal) 氏が訪ねてきました。(中略) しかしながら重要な点は、彼らの集められる、雨樋 (あまどい) や泥の堆積、その他気象学的データで示された地域で、広島や長崎中で彼らはサンプルを得てきたことです。後者 (気象学的データで示された地域で得られたサンプル) は核分裂物質の場所を特定するための主要な要素となり、原爆の当日と翌日の降雨の範囲についての報告を、相当の均一性を持

って決めることができるでしょう。一部が私たちの元に残され、一部は彼らが国に持って帰りました。収集された試料は、いずれも先述のフィルムテストでは陽性でした」。このように1950年に米軍が持ち帰ったデータでも、黒い雨（放射性降下物）の影響が示唆されていたのです。

公式には否定し、軍事目的では重視して調査してきた米軍。公式には否定する上、非公式にも被災者の訴えを調査もせずに見做してきた日本政府。黒い雨によって被災してきた人々の声を無視し続けることは、原爆・放射線による被災を過小評価するということで、原爆が国際法違反であること、毒ガス以上であること、非人道的であることを米国と一緒に隠蔽するという事です。機密扱いされ続けた軍事目的の調査に加担するということです。黒い雨によって被爆した原告側の証言を信頼し、増田雨域・大瀧雨域によって示された広大な被災地域や内部被曝の影響を重視し、原告側の勝訴の判決を下した広島地裁の判決を受け止め、原告のみならず可能性のある人への補償・賠償を行うこそこそが、日本政府としての責任だと思います。



1945年9月13日付『ニューヨークタイムズ』記事

29 March 1950

Dr. Philip S. Owen
Dr. Herman S. Wigodsky
Committee on Atomic Casualties
Division of Medical Sciences
National Research Council
2101 Constitution Avenue
Washington 25, D. C.

Dear Phil and Wig:

This is a letter devoted to only one portion of a multitude of things which have faced us on our return. I had hoped that you would get a lot of the incidental information from the routine flow of materials, which of course I will supplement.

As I indicated in a somewhat vague fashion over the telephone, the two gentlemen visiting us from Tracerlab, Mr. Menker and Mr. Levensthal, conducted a rough survey of Hiroshima for residual radioactivity. There are a number of interesting features to this in the background which I hope one or the other of them will be able to tell you personally. By rough survey, I am referring to the quick checks which they have made with a fairly sensitive Gieger Counter of the survey type and by the use of ordinary film. They have had a tendency to rely more particularly on the results from film in the ranges which might exist here at the present time, with exposure times of the order of several days to several weeks. This accounts, of course, for the delay following my mention of the subject. The significant point, however, is that they obtained a number of samples throughout Nagasaki and Hiroshima, paying some attention to possible areas of concentration such as rain gutters, silt deposits, and areas indicated by the meteorologic data which they were able to gather. The latter appears to be the main element in locating fission products, and they were able to determine with considerable uniformity, reports of the extent and location of rainfall in the day or two following the bombing. The specimens which they gathered—portions of which they have left with us and portions of which they have carried with them on their return to the States—have all turned out to be positive with the above-mentioned film test, which was simply a question of prolonged contact between earth samples and the film. We put one of our people (Nishi) on the same sort of rough survey during the last few days that these Tracerlab gentlemen were with us for purposes of acquiring the technique and extending the survey if necessary. The results of the samples collected by us have not been read.

You will recall that my one reservation at the Committee meeting was based on the satisfactory demonstration that no significant amounts of radioactivity remain, and it was my general impression that this fact was not fully discussed. I believe we are in a more or less unknown field if we attempt to evaluate the biologic significance of the presence of radioactive materials at this relatively low level of activity. It will require much more data to establish the fact that

Dr. Philip Owen
Dr. Herman S. Wigodsky

29 March 1950

serious side effects. I feel that this need for reconsideration has resulted from data which we should have had available at the time of the recent Committee meeting, but I do not believe it is too late to arrive at the proper solution. To boil this down as much as possible, I feel that these findings call for rather prompt action and that it represents one of the critical points in the entire program.

While there may have been some difficulty in determining the point to which budgetary consideration should limit the design of this program previously, I have no doubt whatever that the present situation is one which bears far more weight in determining the plan of operation. Taylor and I do not think that the present course is tenable and are very much concerned with a proper solution.

I am making a short visit to Nagasaki, leaving Hiroshima 29 March and expecting to return Monday, 3 April, at which time I will telephone again.

Grant and I are again experiencing that feeling of restriction imposed by the 7,000 miles between us and miss the opportunity to sit down and talk things over. Best wishes.

Sincerely,

Carl F. Tessmer
Lt. Col., M. C.
Director

CFT:EGC

P.S. I hear Dr. Kobayashi of NIH leaves Japan between 1 and 15 April for a visit to the U. S. for approximately three months. He is very interested in visiting NRC and will probably materialize at some time during that period.

1950年3月29日付カール・テスマーA B C C所長から米科学アカデミーの科学者宛書簡（米科学アカデミーA B C Cコレクションより）